

秋田県
国語・算数・理科
デザイン!
2023

若者と地域をつなぐプロジェクト事業

主催：秋田県 あきた未来創造部地域づくり推進課
運営：一般社団法人ドチャベンジャーズ
企画：トータルディレクション：渋谷デザイン事務所





令和5年度
若者と地域をつなぐプロジェクト事業

国語・算数・理科・デザイン！
最終成果 BOOK



ただただ観察する、デザインの旅

日常にあふれている、日々の隅々を『観察』することをつけに、地域を意識し、地域とつながろうとする感情を育み、そしてその先に何らかの行動・アクションを見出そうと、もがき続けた半年間のデザインプログラム「国語・算数・理科・デザイン！」。

県内の高校生で構成された合計8チームが、何気ない日常を観察し、半年間「**地域とつながるとは、どういうことだろう？**」と悩み続けました。そしてその先に自分自身の本当の感情が動き出すのをじっと待ち、耐え続けた『葛藤の過程』を正直に愛で合い、大切にしてきました。

身近にある何気ないモノや風景、はたまにヒトの観察トレーニングからはじまった半年間のデザインの旅。今まで感じたことのないような、答えのない手探りな初めて

の旅にチャレンジしてくれた高校生たちの中に湧き出てきた、嘘偽りのない半年間の『**本音（過程）**』。今回、それを地域の方々にもしっかり見届け感じていただきたいと思い、最終成果をまとめたのがこの一冊です。

どこかで見たことのある、いかにも正しいような答えに頼ることなく、悩み苦しんだ過程をそのまま見せ、曝け出すということは、とても怖くて勇気のいることだと思えます。しかし、その不安と葛藤にめげることなく『**地域とつながる実感**』を模索し、泥臭く掴み取ろうとした軌跡こそが、参加者全員の成長の証であり、この事業の成果だと信じています。

※1 そんな全8チーム、そして運営チームのMOD & CODが必死に駆け抜けた半年間の軌跡を、たっぷり、そのまま地域の方々に感じていただけたら幸いです。

※1 チームMOD：プロジェクト全体を運営するチーム名。ちなみに「MOD」は「もっとお尻を出す」の略

※2 チームCOD：このプロジェクトに参加していた卒業生（高校生等）で構成された

MODの運営を支えてくれる、心強いパワフルな若手チーム。ちなみに「COD」は「ちょっとお尻を出す」の略

国語、算数、理科、デザイン！



反抗心の 根本を 引っかく

キュアまーめいど

観光地と呼ばれる
地域にある高校に通う
高校生の本音



チーム『キュアまーめいど』の左から、佐藤りあらさん、門脇みなみさん、澤田京弥くん



ディベート部の先輩に誘われて同じクラスでチームを組んだ角館高校の3人組『キュアまーめいど』。同じクラスといっても、仲良しというほどではなく、チーム名を考えるのに苦戦。お互い好きなものを出し合っていくと、プリキュアと海にちなんだものが好きという共通点があったことから『キュアまーめいど』に決定。

2回目の集中ワークショップの時に、I&C Creations (d 32) が観察・発見した、秋田市にある不思議な空間の写真を活用したことから、2チーム合同で不思議空間の観察をするに。2チームそろって秋田駅に集合し、謎を解くべく近隣の店舗にヒアリングを敢行（詳細はP32）。勇気を持って家のチャイムを鳴らしたり、出会った人に「あの扉のこと、知りませんか？」と訊ねたり、観察の先に地域の人々に話を聞きつながら体力をつけていった。

チームで活動すると、お互いに感情が湧き上がってくる。「真剣に話してはいけるけど、チームに話を聞いて貰えていない気がする……」「自信がなくて、この



〔発表資料提供：キュアまーめいど〕



まま活動を続けていいものか……」と、互いの距離感や関係性が明らかに。でも、思っていることをチームに率直に話してみれば、コミュニケーションの取り方が違ったり、自分にはないものを持っていることを認め合っていることがわかる。1人ひとりの凸凹が見えて、チームの関係性はぐっと近くなっていった。

3人が住んでいる地域は、田沢湖、大曲、のきない 松木内。3つとも秋田が誇る観光地。通う高校は角館、秋田の中でも有名な観光所のひとつ。みちのくの小京都と言われ、武家屋敷が続く美しい街並みがある。チームの1人・澤田くんはこの景色が好きで角館高校に進学を決めた程度。

10月に開かれた中間報告会での発表で、通学路で観光客の方に声を掛けられたエピソードを共有してくれた。武家屋敷を通して駅に向かっていくと、観光客から「この道が通学路なんですか?」「この町並みは本当に美しいですね。通学路だなんて羨ましい!」と笑顔で声を掛けられた。しかし、その何気ない一言に、門脇さんは奇立ちを覚えてしまった。そ

悪態をつきたい衝動が 自分の中に起こった



[発表資料提供：キュアまーめいど]



の場では言い返さなかったものの、内心では「毎日通ってるし、生まれもこの地域でいつも見てるから、綺麗だなんて思わない」と悪態をつきたい衝動が自分の中に起こったという。内陸線を通学で利用する彼女は、平日の朝夕に乘車するときは座れるものの、模試などで土日に出掛けるときは、観光客が多いため満員電車ですばらく立たざるを得ない。観光という非日常で訪れる人たちに、日常で出会う高校生たちの心には、いろんな感情が蠢いている。

大曲といえば花火。でも、暮らしている彼からすると「ただうるさいだけ。友だちの家でゲームをする言い訳に花火大会を使う」くらい厄介なもの。

スキーリゾートで風光明媚な田沢湖。住んでいる彼女からすると、「そもそも、田沢湖で遊ばない。遊ぶなら大曲か秋田」と興味がない。チーム3人ともが、観光地としての見え方と暮らしている地域のギャップに反発を感じていた。

最終成果報告会では、「反抗心の根本を引っかく！」をテーマに発表。生まれ育った地域を素直に受け入れられない状態・理由を、3つの言葉のデザインに落とし込んだ。地元に着がある一方で他人に伝えようとするとぶつさらばうになってしまう「地元へのツンデレ」。長年共に暮らし続け関係性が熟成し、落ち着いてしまっている「熟年夫婦」。長年アイドルを応援し続けすべてを知っており、敢えて音楽ライブ会場では最前列で応援するのではなく、後方で彼氏のような面持ちで静かに見守るような「後方彼氏面」。地域への愛着はあるけれど、素直に表現できないもどかしさを、こういった言葉で表現してくれた。



[発表資料提供：キュアまーめいど]



ギャルマインド「南高革命」！

DEAR

この事業が始まる前に開催された事前説明会にも、積極的に2人揃って参加してくれていたチーム『DEAR』と、最初にきちんと顔を合わせたのはオンライン面談のこと。急遽、昨年夏の大雨予報のため保坂さんのみの参加となり、公共施設のような空間からのオンライン参加だったのだが、全く人目を気にする様子もなくスラスラと喋ってくれる保坂さん。例えば「保坂さんは友人たちからどういう人だと思われる？」という質問には「多分パリピ！」と即答。「でも、結構真面目にやっています！」と明るく答えてくれた姿が印象的だった。イマドキのJKと安易に括ってしまうことにはいささか違和感を覚えるが、彼女の屈託のない天真爛漫さがすごく安心させられるものに映ったことは確かだった。

チーム『DEAR』の、進藤悠花さん(左)、保坂愛来さん



対面での1回目の集中ワークショップには都合がつかず参加できなかった2人は、秋田市の松倉で開催された2回目の集中ワークショップの場で、自分たちの観察センスの本性を露わにする。かき氷の味に対する思い込みの観察(ブルーハワイ味ってどんな味なの?)や、「推し」のためならいくらでもお金を払ってしまうという狂った金銭感覚の観察、雨が降る音(オノマトペ)の観察の先に見える言葉の世界の広がり等々……、他のチームとは一味違った観察の切り口に、このチームの今後が楽しみに思っていたMODだった。

が……しかし、その後しばらくの間、『DEAR』の2人とは音信不通になってしまふ……。月日がどんどん過ぎていく代わりに我々の焦りはどんどん増幅していく。幸いなことに『DEAR』の2人が通う高校には H&C Creations (d32) という別のチームが在籍していたことから、そのチームのメンタリングを口実に『DEAR』の2人にも参加してもらう約束を取り付けることができたのだ。



多分パリピだけど、結構真面目です

いざ、久々に対面してみると2人は茶目っ気たっぷりに「Stack 見てなくてごめんなさい!」と、こちらの心配はどこ吹く風といった様子(汗笑)。その後もグローバル人材や地域医療のこと、高校の制服への不満や祖父との思い出等々、2人の日常の興味の話を聞き、次回は運営メンバーMODの柚木の勤務先でもある、秋田公立美術大学へ集合することに決め一旦解散となった。

そして2月20日。最終発表まで約3週間を残しての2人との再会。いつものように自然体で美術大学に到着した2人が案内されたのは、美大の学内でもとりわけカオスな部屋で有名な柚木研のゼミ室だった。前回の話の延長から試験勉強の話になると、2人がカバンから取り出したのは、表紙がライNSTOINでdecorated参考書だった。2人が言うには、辛い勉強も教科書や参考書が可愛くデコられていれば苦ではなくなるとのこと。偶然ながら、柚木研の学生の間でも「デコる」ことが流行した時期があり、その時に買い集めたライNSTOINのストック

※3:好きな人やもの、応援したい人やもの、人に勧めたいほど気に入っている人やものこと

※1:大勢で盛り上がるのが好きな人。大人数での飲み会やパーティーなどノリのよい集まりを好む人のこと ※2:女子高校生活を意味する言葉

が大量にあった。それらを『DEAR』の2人に差し出し、ひとまず参考書の「追いデコ」をすることに。『DEAR』の参考書は、もはや何の本なのか初見では分からないレベルまでキラッキラに装飾されたのである。気がつけばそれだけで3時間。我々のこの時間は一体何だったのだろう？ でもなんだかスッキリ！ ギャルマインドで満たされた感じや達成感も確実にある。こうしてまた対面の時間が一瞬で終わっていったのである。

そして、その後も安定して音信不通になった『DEAR』の2人（汗笑）。念の為何度か連絡を試みるも、特に進捗の確認もできずに最終発表会を迎えてしまう。だが、それでも不思議とギャルマインドで何とか乗り越えてくれるような、そんな期待と不安があった。「最終成果報告会当日は、私服で構いません」と全員に案内を出していたにもかかわらず、敢えて高校の制服で現れた2人にどのような発表になるのか確認したところ、そつと「国語・算数・理科・デザイン！」Tシャツを出して見せてくれた。そこには秋田

だった。そして、彼女たちはアンケートを収集したただけにとどまらず、そこから独自に「こんな可愛い制服があったらいいのに！」とギャルマインド全開でデザインし、最終成果報告会の会場盛り上がりへのプレゼンテーションを成し遂げてくれた。発表の最後、保坂さんが何気なくまとめの話をしていた中で、「私たちが感じた課題」と言いかけたところを、「いやっ、私たちの文句！」という言葉に言い直したその一瞬に、彼女たちの本音、そして嘘の無いギャルマインドを、確かに見ることができた気がした。

その一方で、午前中に見せてくれた、当初発表予定だったTシャツは一切あの場では日の目を見なかった。発表後、なぜわざわざ今日のために用意したTシャツを披露しなかったのか？ と聞いてみると、あっさり「なんかいらなくなってしまった！」との、これまた『DEAR』らしい淡々とした返答が返ってきた。

要素を引き算することや、大きく舵を切る勇気は、プロのデザイナーであれば経験と共にありうることだが、ライブな



課題じゃなくて、私たちの文句！

県の形がデコられてあり、装飾がされていたようだった。どうやら気に入っていない制服の代わりに、デコったTシャツについて発表したのだから。それにしても、あれだけ夢中でやった参考書ほどのデコの威力が足りない……と、その場で感じたのが本音、そして午後の発表へ。いよいよ緊張する中で迎えた『DEAR』の発表の順番。そこには、運営チームのMODの心配や予想をはるかに超える量の考察と提案が、『南高革命』と題して並んでいた。最終的に秋田南高校の志願者数が年々減少傾向にあることを懸念した2人は、「南高校の生徒に Instagram で母校に対する『文句』をアンケート収集し、そのデータをもとに、ギャルマインド全開で南高の魅力度アップ作戦を決定してやろうというのだ！

そうして収集した『文句』のトップスリーが、①制服がダサくて不評、②部活が少ない、③小テストが多過ぎる、以上の厳選された3点だった。中でも、彼女たちの思い入れが強いと感じたのが、①の「制服がダサくて不評」という『文句』

あの場で、高校生にして思ったことをスバツと決断できるその判断力にはかなり驚かされたMODのメンバーたち。こうして見事にギャルマインドを発散しまくった2人は、いつにも増してキラッキラに輝いていた。



……と、そんな半年間お騒がせチームだった『DEAR』の2人から最終成果報告会が終わった日の夜、この半年間を振り返ってみたいの感想と反省、そして運営陣へのお礼のメッセージが届いていた！ 次ページ(P14-15)へ急げ!!

こんばんは。今日はありがとうございました！今日の最終報告会では、自分たちの身近な学校の問題について深く考える機会を得ることができました。また、他のチームの発表を聞きながら、小さなことでも詳しく観察したり、調査したりすることで新たな事実や共感を得ることができると改めて感じました。まさか自分がモチベーションを上げるためにデコっていた古文単語か

周りを観察し、
深く調査する
姿勢を
持ち続けたい

ら、これほど話を広げられるとは思ってませんでした(笑)。
また、自分たちで考えた制服について私たちは可愛い！こう変えたらいいのに！と思っていました。自分の学校の制服に似ているけれどあまり気に入っていないというふうに言っていた参加者がいたように、キュアまーめいどの方々が発表した地元に対する価値観の違いのようなもの

が、制服に対する評価でもあるんだなと思いました。
長くもあり短くも感じられたこの半年間、多様な方々の話を聞き、多くの学びを得ることができました。この自由な研究活動において、迷惑をおかけした部分があり申し訳なかったです。当初は軽い気持ちで参加したものの、この活動を通じて自分の関心事への視野を広げ、観察することの楽しさを発見できたことを嬉しく思っています。今後も好奇心を大切に、周りを観察し、深く調査する姿勢を持ち続けたいと思います。夜分遅くに長文をお送りし、申し訳ございません。今後ともご縁がございましたら、どうぞよろしく願っています。

DEAR 保坂愛来



「違和感」と
「苛立ち」という
一番の収穫

プロジェクトで得た一番の収穫は、この「違和感・苛立ち」だと思います。これまで私は「変わるともつといいけれど、別に変わらなくても困らない」と考える人間でした。きつと、今の社会で上に立つ人間もそうなのだと思います。ですが、今回「南高革命」用の発表をまとめる上で、「大人に認めてもらえないもどかしさ」を強く感じました。だからこそ、ギャルというレッテルで反抗したくなったのかも知れません。

思ったより長々となってしまい、自分が一番驚いています。ですが、皆さんから教わったことはしっかりと私の心に、私だけの形で根付いています。私が大人になる頃には、若い子にこんな苦しい思いはさせたくないです。皆さんのおかげでそう気付くことができました。

約半年間、本当にありがとうございました。またご縁がありましたら、よろしく願います。

DEAR 進藤悠花



こんばんは！今日は一日お疲れ様でした。MODの皆さんに感謝の気持ちを伝えたいと思い、このメッセージを打っています。この半年間、皆さんには沢山ご心配や迷惑をおかけしてしまいました。急に音信不通になったり、かと思ったら約束を取り付けてきたり……。高校生として、皆さんの器の大きさに甘えてしまいました。その節はとても反省しております。

最終成果報告会では、今の自分たちが感じていたモヤモヤを存分に発散できたと思います。帰宅後、早速皆さんから頂いた付箋を見てみたら、内容に共感してくれるものが多くあって、私たち以外にも不満を感じている人は少なくないのだと知りました。その反面、それなのに、変わろうとしない学校・社会の仕組みに少し違和感や苛立ちに近いものも感じます。今回私がこの

秋田の良いろ なんて……



チーム「ピタゴラス数」の左から、一関夢人くん、佐々木葵生くん、佐藤 廉くん

見方次第で そんなもん いくらでもあるだろ

ピタゴラス数



初めてプロジェクトに参加した初日から、ワークショップ会場の設営(看板設置)を手伝ってくれる『ピタゴラス数』のメンバー。過去にこんな積極的な参加者、見たことない……(驚笑)



無駄に多くて、逆に不便な自転車止めの観察



不思議な雪の積もり方の観察 [写真提供: 一関くん]

具の色」、「高専の南門にある自転車止めの本気度」など、観察は場所、時間、ジャンルを問わず続き、気づけば全参加者の中でも1、2位の投稿数にのぼっていた。

“友情とカオス” そんなタイトルをつけたくなってしまったチーム『ピタゴラス数』の観察の旅。高専1年生、自称鉄オタの一関くんが声を掛けたのは、同じクラスの文系男子・佐藤くんと初代秋田デュエル王者・佐々木くんだった。趣味も性格も、頭の良さもそれぞれ違う3人だが、なぜか仲が良く相性も良い。そんな3人は、まるでピタゴラスの定理(各辺の比率が3:4:5だった場合、その三角形は必ず直角三角形になる)における各辺のようだ……というなんとも高専生らしい理由で『ピタゴラス数』というチーム名は名付けられた。

そんな、今期唯一の男子3人組チームは、毎度のごとくワークショップに誰よりも早くやって来ては、会場設営などの事前準備を手伝ってくれた。彼らの前めりな姿勢を終始引っ張り続けたのは、やはり発起人、一関くんの観察力だっただろう。自称鉄オタというだけあって、電車やバス、駅周辺の観察はもちろんのこと、それ以外にも「ガードレールに積もった雪の形」、「道端に落ちている絵の

そんな折に開かれた2回目の集中ワークショップにて、『3』チューバット(以下、『3』)(p36)という女子高中生チームが、四ツ小屋駅の観察をしていることを知る。一関くん含むピタゴラス数は、プロジェクトの運営チームであるMODのメンバーからの助言もあり、なんとクリスマスイブにも関わらず四ツ小屋駅に集まった。事前に一関くんが解説した長いホームを実際に端まで歩いた後、駅構内も観察。その後『3』の地元である御所野に観察の現場を移し、住宅街には似合わない「熊出没注意」というサインにも心底驚く。

こうして彼らはチームの枠を超えてカオスにつながり始めるのだが、彼らの観察から湧いてくる好奇心には、それ程の強度があった。MODのメンバーが彼らが手配してくれた秋田市の会場で面会した際にも、先に集まった一関くんと佐藤くんは、「集合時間にちょっと遅れる」というMODのメンバーの言葉に対して、「ちょっとって何分だろう?」という問いを立て、普段の何気ない出来事

く。「自分にとっては普通でも、他の人にとってはまた違う見方があるのだということを知った」と語る佐々木くんは、最終成果報告会に、彼の得意な絵で、チーム『ピタゴラス数』にロゴをデザインして添えた。また、佐藤くんは「(観察が)周囲の人や自分について深く知るきっかけになった」と語り、文系である自分を活かして、最終成果報告会の後日に放送されたラジオ収録用の原稿を作成した。そして、一関くんを中心に、12ページに渡る報告書を徹夜で作成し、この半年を経た3人にしかできない、高専生らしい前のめり全開の発表となった。

最後に、以前にメディアの方(NHK秋田放送局ディレクターの秦圭矢乃さん)に取材で聞かれ、上手く答えられなかった「秋田の良いところは何?」という質問に、一関くんが改めてこう答えて、彼らの発表の最後を締めくくった。

「『見方次第でそんなもんいくらでもある』。私は、この半年間の観察を通じて、多くの人たちに『多様な視点』というものを理解してもらって、各々が感じる

正直な「なんか気になる……」を



NHKの秦さん(左)とI3Lチューバットの村木さん(右)と
[写真提供: ピタゴラス数]



緑屋ビルの看板観察の末に辿り着いた、近隣店舗の取材



集合時間に8分遅れてやってきたMODの黒崎(左)、すみません……



I3Lチューバットの2人と四ツ小屋駅の観察

を検証の対象に変えてしまうのだ。また、『3』のメンバーがアップした「秋田駅前にある緑屋ビルの看板の1文字が消えた」という観察投稿(詳細はp36)を知ると、『3』の村木さんと共に現場を探りに街に繰り出す一関くん。周辺を探索した後、近隣のお店に聞き込みを行い、ついにはビルの管理人にまで巡り合ってしまうのだ。

こうした一関くんを筆頭とした彼らの確かな観察量と、そこから生まれた正直な「なんか気になる……」は、次第に彼らと地域を近づけていく。

そして、観察のフィールドが自分たちの生活領域をはみ出していくにつれて、彼らは「高専生としての自分」を意識するようになる。最終成果報告会間近となった3月6日、彼らは「国語・算数・理科・デザイン」の全メンバーに向けて高専見学会を企画・開催した。高専内を案内する中で、自分たちがチームメンバーにも、外部の人たちにも、それぞれ違って映っていることに気づき、高専生としての自分たちがさらに気になってい

「良いところ」を増やしてほしいと思っている。

この半年間、秋田という地域を、どのチームよりも観てきた(観察投稿数で比較した場合)『ピタゴラス数』だからこそ導きだせた、嘘のない強度のあるこの言葉は、私たちに「地域とつながる」ということの根っこ・本質の部分を真っ直ぐに示唆してくれたように思う。



画鋺と 武家屋敷の旅

sugar



チーム「sugar」の左から、佐藤ひかりさん、羽川如葉さん

りの観察が目立った。また、学校では「窓側の席の生徒が、カーテンで防ぎきれない日差しの餌食になる悲劇」、「網戸が付いていない窓の謎」、「缶や瓶の蓋がキャップタイプと、飲み切りタイプで分かれていた謎」など、確かに言われると気になる「なんでそうなるの？」を発見して面白がついていく。

そんなある日、2人は「押し手が折れて針だけになり、もはや壁から抜けなくなってしまった画鋺」を見つける。折れやすく、一度折れたら抜くことは難しい……という、画鋺の意外な盲点に気づいた彼女たちは「シンプルに折れない画鋺ってどんなの？」と調べてみるも、見つけれなかったのは、抜きやすさや、ピン跡に配慮した画鋺ばかりで、理想の画鋺を見つけることはできなかった。

この結果に納得がいけない2人は、画鋺の観察を続けるのだが、その熱量はMODの想像を越えていく。2人の近況を聞こうと、MODのメンバーが角館を

画鋺を観察するために、武家屋敷通りへ?!



身の周りの観察で見つけた「画鋺」の数々



[写真提供: sugar]



いざ、角館の武家屋敷通りへ観察調査に!



[写真提供: sugar]

訪れた際、1時間という短い時間にもかかわらず「これから武家屋敷に行つて一緒に画鋺を観察したいんです」と誘われ、すぐさま武家屋敷通りに向かった。居酒屋の外壁に貼り出されたメニューが画鋺で留められているのを見つけると、「い

父がマタギでもあるという羽川さんは「空き地の花を仕切る紐」や「夏に枯れ始めた木の葉」など、植物周りから観察を始めたのに対して、大工の父を持つ佐藤さんは「家の周りや屋根の作り」「使われなくなった百葉箱」など、構造物周

を決意した。

そんな「in the morning」が同校の文化祭で、「国語・算数・理科・デザイン」での半年間について熱弁しているのを見て興味湧き、その後配布された「足・目・耳」が大胆に描かれた参加者募集チラシに「今の私には無い、斬新さが得られるかもしれない(佐藤さん)」と、羽川さんと2人でチーム「sugar」を結成し参加を決意した。

角館高校ディベート部に所属している「sugar」の2人は、昨年の「国語・算数・理科・デザイン」に参加くれたチーム「in the morning」のメンバー・佐々木さんの後輩だった。佐々木さんは、今年のプロジェクトの企画・運営に関わってくれた高校生運営チーム「COOD(ちょっとお尻を出す)の略」以下、COOD)のメンバーの1人でもある。

つから使ってるんだろ？」「メニューは取り替えないのか？」「画鋲はずっと同じものを使ってるのか？」……と、彼女たちの「気になる」がとまらない。そしてモヤモヤが頂点に達した彼女たちは、なんと開店前で準備中のお店の扉を叩いて、話を聞き始めた。

「この人たちは、一体何をしに来たんだ？」という表情で店員に警戒されるなか、「県事業の活動の一貫で……、画鋲について聞きたいんですが……」と、恐る恐る質問をし始めたと思ったら、意外にも話は弾み、いつの間にか2軒目の扉も叩く2人！ 重要文化財の外壁に直接画鋲で「落雪注意」の貼り紙がされていることも衝撃だったが、それよりも、屋外で使用される画鋲が「サビで脆くなっている」という新事実に辿り着く。画鋲が折れてしまうことに「サビ」が関係しているということを目の当たりに耳で掴み取った2人は、つまり『折れにくい画鋲とは、サビにくい画鋲なのではないか？』とこの時点での1つの答えに辿り着く。

それにしても、画鋲を観察するために

武家屋敷に出掛ける女子高生がかつていただろうか？ 画鋲を探すのに苦労していた2人は、なぜか「武家屋敷ならあるんじゃないか（羽川さん）」と思ったという。それは、この場所で高校生活を送る彼女たちだから持てた、地域の感覚なのではないだろうか。武家屋敷を身近に感じていたからこそ、観察に出掛け、扉を叩き、直接地域の方々に話を聞くことができた。『画鋲の折れやすさ』という自分たちの疑問に迫っていたはずが、最終的には地域という文脈をより強く認識する結果となっていた。画鋲1つでここまで武家屋敷とつながれた『sugar』の2人に、改めて地域とつながることにおいて、「足を使って観て、聞く」ということの重要性を教えてもらった気がする。プロジェクトが始まる前の面接当初、自分には斬新さが無いと語っていた佐藤さんは、すっかり「知らない人に疑問をぶつけてしまえる」斬新な人になっていた。「これから画鋲を見続けたい」と語る2人の旅路が、今後どのように展開していくのか楽しみではない。

画鋲1つからだって、地域につながっていける



[写真提供:sugar]

角館の武家屋敷通りでの観察で見つけた「サビた画鋲」や「画鋲で貼られたメニュー」



デザイン！

理科

国語

算数

2023



“大切に する” という 感情の 先に 観る 地域 スキライ

の連携が求められており、授業の一貫に「地域課題の解決」という命題が組み込まれている。2年生からは地域プロジェクトとして、三関のさくらんぼなどの特産品を活用した商品開発に関わる授業がある。特産品開発や地域課題は、地域側の需要もあり、学校の学びの題材として扱われやすいテーマ・状況になっている。

一人一人の関心を育む探究の時間ではあるものの、地域側の需要によるテーマ設定があることに息苦しさを感じる学生もいる。必ずしも最初から、「SDGs」や「地域活性化」にすべての高校生が関心を持っているわけではない。「スキライ」の2人がこのプログラムへ参加したいと思ったきっかけは、「自由に探究したり表現できること」とにかく、この「国語・算数・理科・デザイン！」のプログラムで取り組む観察対象は、参加者の本音にすべてを任せている。生徒が観察の先に見つけた小さな関心から始め、その関心を広げ育みながら、心が動く問いやテーマに近づいていく。その過程の中で、結果として「地域につながる」という本

湯沢翔北高校の写真部の女子2人。幼稚園から高校まで、部活も同じ仲良しの2人で結成したチーム名「スキライ」の由来は、お互いの好きなもの、嫌いなものが逆転していること。それを互いにぶつけあっていけば、嫌いなものも好きになれるかもしれない……という、そんな想いがこの名前には詰まっている。

先生からの紹介でプログラムを知り、過去のプロジェクト活動記録本を読み、自由に探究したり表現できることに魅力を感じて応募した。

2回目の集中ワークショップの発表の場で、開口一番「忙しくてなにも準備せずに来ました！」と堂々と宣言。他の全チームがスライドを用意している中、2人は手元に何も無いなかでも楽しそうにイキイキと話し始める。学校のプログラムで、三関の地域を訪れ、特産品づくりのお手伝いや、地域の課題をうかがった体験について語り、今後もこの三関で活動してみたいと意気込みを語っていた。

例年、このプロジェクトへの参加者が多い湯沢翔北高校では、日頃から地域と

学生の本音を起点に
地域に気づきつながっていく

のアクション・デザインが待っている。
地域を起点に学生をつなぐのではなく、
学生の本音を起点に、地域に気付きつな
がってゆくことを目指している。どこま
でも、学生の主体性を尊重するところに、
高校生が求める自由があるのだと思う。

2人の観察は、プロジェクトの期間中
に林崎さんが唯一投稿した、学校の壁面
に使われないまま、密集している「画鋏」
に始まる。前述のチーム『Sugar (p.20)』
に続く、まさかの小さな「画鋏」に惹か
れる女子高生がここにもいるとは驚き！

彼女たちは観察の先に、最近「画鋏」
を使っている人が少ない理由として、①
ホワイトボードの増加（マグネットを使
用する機械の増加）、②壁に穴を開けたく
ない、③SNSで情報発信する機会が増
加したこと等々を挙げ、「画鋏」という
存在について考察を深めていく。また、
「画鋏」というものの機能そのものにつ
いても考察し、①軽いものを支える（掛
けておく）ための機能、②壁面にアートの
するためのパーツ素材としての機能、③手
づくり如雨露を作るための穴空け機能

（ス内）で活用されている「画鋏」の状況。
その状況への疑問について、役所職員へ
質問し、地域との関係を築いていた。

そして、発表の最後。使い終わった後
に放置された「画鋏」に対し、大切に画
鋏が使われていないこと」に気づき、「画
鋏」が大切に使われ続けるためには、使っ
た後に片付けたくなる「画鋏」のデザイ
ンが必要だと思いついた2人は、なんと
「画鋏」の持ち手が47都道府県の形になっ
ていて、使い終わった「画鋏」は元の日
本地図に戻す（片付ける）ことのできる
「画鋏」のデザイン案を発表（驚）！

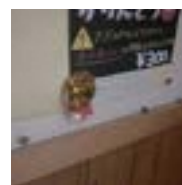
観察を通して自身に向き合い気付いた
感情は「大切にすること」。「使われな
くなったものを再活用する」という「マ
イナスをプラスにする」発想から、「大
切にする」という感情が内面で動いたと
き、地域はもっと愛おしく映って観えて
くるはず。「活性化の対象としての地域」
ではなく、「私たちが暮らす地域」とい
う認識へ。「画鋏」という小さなものか
ら大きなもので、彼女たちが心を寄せ
る関心はこれから広がっていく。



高橋夕七さん（左）と林崎絵麻さん



様々な画鋏の活用例



意外な画鋏の使い方を発見！
ペンフォルダー！？

市役所の掲示場は明治21年に市町村における公
告式が制度化した頃から設置されたもの。また、
ガラスケースに鍵がかかっているのは、条例や
規則などの内容を市民の方々に手に取って見て
もらえるようにすることが目的であること等々
……。『画鋏』の観察をきっかけに、市役所の職員
とのコミュニケーションも深めていった『スキクライ』
の2人の行動力は、あっぱれ！

例1 47都道府県にしちゃう



最終成果報告会での発表の最後に、会場を沸かせ
た『スキクライ』の画鋏デザイン案！ デザイン案
を提案しつつも、「子供の教材として使えるけど、
大人は使い辛いかも」「1つあたりのコストが高
くなるかも」「幅をとっちゃうかも」……など懸念
される点について発表していた姿勢もグッド！

〔発表資料提供：スキクライ〕



鍵が空いている掲示場



クリップが掛けてある



昔は使われていたけど、
今は使われなくなったもの

等々を挙げ、あたかもデザイナー的な考
察を展開していく。

そんな「画鋏」を観察する思考と並行
して『スキクライ』の2人が目を付けた
のが、学校からすぐの湯沢市役所向かい
の山（小さな丘）の上にある、使われな
くなったステージ。「昔は使われていた
けど、今は使われなくなったもの」に関
心があり、この場所をなんとかできない
かと考えを巡らしていく。彼女たち2人
は、観察対象から課題設定へと急ぐ傾向
があり、自身や地域への関心を育む前に、
社会にとっての成果を出す意味での「地
域活性化」への意識に向かいがちな様子
が見られ、運営チームMODのメンバー
は、その姿勢を少し懸念もしていた。

そして迎えた最終成果報告会。彼女た
ちは、学内でのプログラムの一貫であつ
た三関の活動の報告ではなく、最初に観
察の対象となった「画鋏」をテーマに発
表の場に立った（というか、正確にはリラッ
クスしてステージの台に座って発表した！）。
使われなくなったステージの向かいに
ある、湯沢市役所前の掲示場（ガラスケー

チーム名の中に「Creation（創造）」という言葉を選んだ、秋田南高校の青木千鳳（C）さんと佐藤歩香（H）さん達2人チーム「H&C Creations（以下、H&C）」は、まさにその名の通り、このプロジェクトが始まった当初から、既にデザイン的な観察の視点を身に付けているような印象のチームだった。そんなH&Cの1人、青木さんが最初に観察し気になったものが、餃子や牛タンが買える珍しい自動販売機が存在。そして一方の佐藤さんは「行動経済学」というデザインの領域に近い学問への興味湧き出し、その観察の眼は、広い世界をぐいぐい観るようになっていく。



秋田市内で発見した不思議空間。普通なら見過ごしてしまう何気ない風景が2チームを結びつけ、地域とつながるための体力や気持ちを養うきっかけとなっていた。

〔写真提供：H&C Creations / キュアまーめいど〕

じ、この空間を見過ごせなくなる2人がいた。そうして、そんな2人の観察・違和感に共感したチームが角館高校のチーム『キュアまーめいど』（P6）だ。『キュアまーめいど』はどうしてもこの異空間が気になってしまい、わざわざH&Cの2人と予定を合わせて、実際にこの不思議空間と一緒に観に行くことを決行してくれた。勇気を出して、近所の方に「あの不思議空間はなんなのか？」と探索していく彼らの行動は、まさに地域を自分事にし、つながっていきこうとする、このプロジェクトが何よりも大事にする姿勢そのものだった。中間報告会の際、青木さんは「他のチームの人たちが、私気になった観察の投稿を見て共感し、気になってくれたことが嬉しかった」と言葉にしている。こうしてチーム間での交流が生まれ、彼らの観察や気持ちが横断し、融合していく過程は、これまでのこのプロジェクトには見られなかった新しい価値ある風景だった。

そしてH&Cの2人は、高校生活の大イベントである修学旅行先でも、その



チーム「H&C Creations」の、
青木千鳳さん（左）、佐藤歩香さん



東北
こてんぱん
ツアー!?
H&C Creations



秋田 AKITA →



岩手 IWATE →



青森 AOMORI →



宮城 MIYAGI →



福島 FUKUSHIMA →



山形 YAMAGATA →



GOAL!!

東北
こてんぱんツアーの
旅の報告映像は、
こちら(QR)から
ご覧になれます



[映像提供: H&C Creations]



最終成果報告会で、「思い切ってやる
ことの感情が大事なんだな（青木さん）」、
「様々な関係やご縁、機会を逃さず、自
分のものにする力が大事なんだな（歩香
さん）」と、旅を終えた2人は、何かを
確信した晴れやかな表情で言葉にした。
秋田県という小さな枠・地域を超えて、
東北6県をたった1日で駆け抜けるとい
う弾丸ツアーを成し遂げた彼女たちの観
察眼に、これからの秋田という地域はど
のように映ってゆくのだろうか？ これ
からの彼女たちの「Creation」がとにか
く楽しみでならない。

デザインの観察眼を光らせていく。秋田
では真っ赤なツルハドラッグの看板が、
修学旅行先である京都という街では、景
観を損なわないようにシックなトーンで
仕上げられているという事実。自分たち
が暮らす秋田から離れた土地の、そんな
何気ない風景の在り方に素直に驚き、感
じられるようになる2人がいた。
後日、ますます観察やデザインに興味
を向け始めた2人は、プロジェクトのア
ドバイザー兼・MODのメンバーでもあ
る澁谷の事務所（澁谷デザイン事務所）を
訪れる。そこで彼が高校生の頃、2年生
の夏にヒッチハイクで北海道へ野宿の旅
に出たという武勇伝を耳にする。高校生
がヒッチハイクで北海道まで行っていま
う……なんて、これまで考えもしなかつ
た無謀な話に感化されてしまったのか、
H&Cの2人は、JR東北のたった1日
1万円で東北をどこまでも旅できるお得
なチケット「キュンパス」の存在・情報を
ゲットし、とんでもない行動・作戦を思
いついてしまう。そう、その名も『東北
こてんぱんツアー』だ！

たった1日で
東北を一周してやる！



秋田市内から鈍行列車に乗って、週末は無人駅の「飯詰駅」に
降り立った2人は、いざ！ 澁谷デザイン事務所へ！



秋田のツルハドラッグ



京都のツルハドラッグ

[写真提供: H&C Creations]

普段から様々な場面で父親に論破され
ることに悔しさを覚えていた青木さん
は、「いつの日か法律を極めて、父親の
ことを『こてんぱん』にしてやりたいん
です！」と本音を吐く。一方で、父親が
旅のプランを立てることが好き（得意）
で、家族でよく一緒に旅をしていた思い
出のある佐藤さんは、「旅の計画を立て
ることが好きなんです！」と言う。そん
な父親という存在の影響をたっぷりと受
けた2人がタッグを組んで実現してい
まったのが、たった1日で東北6県を旅
してしまおうという、東北観察弾丸ツ
アー『東北こてんぱんツアー』だった。
この『東北こてんぱんツアー』では、
彼女たちがプロジェクト開始当初から、
観察を通じて気になっていた「自動販売
機とバス停」という存在を、東北6県各
所で観察し巡ることが一番の目的で、な
んとも目的自体は地味なものでありなが
らも、若さ溢れるパワフルなツアーがこ
こに実現した。

イノテノアという 地域の なぞなぞ!?

「3」チューパット (エル3リットルチューパット)



すべては村木さん一人の衝動から始まった。「一緒にチームを組んでくれる相方が見つかっていなくて、でも参加したくて……」。そう、このプロジェクトは2人以上のグループでの参加が条件なのだが、そんな一人でも、何かがしたい人」を熱烈に応援しないわけにはいかず。「できれば誰か仲間を見つけてチー

ムを組んでみてね」と、運営チームであるMODからアドバイスをした後日、しばらくしてから「同じ中学時代の友人と一緒に参加してくれることになりました!」との朗報が。こうして村木さんと馬場さんによる、『3』チューパット(以下、『3』)が誕生する。

や、村木さんによる怒涛の観察投稿が始まっていく。どうやら彼女の中で観察を面白がるスイッチが入ってしまったようで(笑)、道に落ちているものから、看板、駅の長さ、みかんの皮……、見るものすべてにツッコミを入れてしまう日々。その観察量は、全参加者の中でも1、2位を争う投稿数にのぼっていた。

そして、その勢いに負けじと馬場さんの観察・視線は、地元の風景やお菓子のパッケージに向けられていった。このプロジェクトの学生とのやりとりや、情報タスクの場となっているSNS上では、チームの2人の間でお互いの投稿にツッコミ合ったり、対話をする姿まで。

そんな観察の日々を送りつつ、いよいよプロジェクトが中盤に差し掛かった頃、村木さんは自身が以前から気になっていた「JR四ツ小屋駅(特にホームの長さ)の謎」を解明するため、実際に現地へ向かうことにする(詳細はP18)。すると、チーム『ピタゴラス数』(P16) 随一の鉄オタ・一関くんを筆頭に、『ピタゴラス数』の佐藤くんと佐々木くんも同行し



てくれることに。こうしてチームを超えてコラボレーションをするという今年度のプログラムを象徴する化学変化が、ここでも生まれるようになってゆく。そんな状況について、「色々な発見をして、その感動を他のチームと共有するのは幸せな時間でした！」と村木さんは最終成果報告会で振り返っていた。

そして、そんな村木さんが秋田駅前で観察・発見し気になっていたものの一つに、秋田駅西口にある緑屋ビルの「イノテノア」という不思議な看板がある。この看板の調査や聞き込みも、『ピタゴラス数』の一関くんと一緒にプロジェクト終盤ギリギリまで行うなど、その知の欲求は益々止まらない。だって、元々「インテリア」と表示されていたと思われる看板から「ン」の字の点部分と、「リ」の短い縦棒の二画が朽ちて剥がれ落ち、「イノテノア」になり、さらにまた時が経ち風化が進んで、頭文字の「イ」の文字まで剥がれ落ちて、最終的には「ノテリア」になってしまっているんだから、気になってしょうがない！もしかした



「イ」の字を探し、路地裏にガンガン入っていく村木さん



観察フェチの最強タグ！村木さん（左）と一関くん



2023年8月30日時点での「イノテノア」



2024年2月18日時点での「ノテノア」

インテリア→イノテノア→ノテノア



[写真提供: 村木さん／一関くん]

ら「イ」の看板が緑屋ビル周辺に落ちているかもしれないと、捜索しに行きたくなる気持ちは、もう止められないのだ！ということで、緑屋ビル周辺を探索したが「イ」の文字看板は落ちておらず、その後、近隣のお店にも聞き込みを行い、ついにはビルの管理人にまで巡り合ってしまう村木さんと一関くんの2人（詳細はP18）。その熱量には、地域のメディアも惹きつけられ、NHK秋田放送局の秦さん（P19）は、彼らの前のめりな奮闘ぶりをNHKの番組にもしてくれた。

誰が導いたわけでもなく、自らの興味から街に飛び込み、勝手に地域や社会、メディアともつながっていく彼らの姿には、MODとCODのメンバーそれぞれに驚きを隠せなかった。

そうして、時期は少し戻るが、2月の初旬に『C』の2人とミーティングをした時の話。2人が指定してくれた国際教養大学のラウンジコーナーで、お土産のみかんを3人で食べながら今後の方針を話し合ったことがあった。中学時代の友人同士である村木さんと馬場さんは、

今でこそ別々の高校に通っているが、今も住む街は同じ。幼少の頃から見てきた街の風景は共通していた。「あその階段ってなんであるんだろう？」「あの煙突の存在が気になるよね」、そんな地元の気になるスポット談義に花が咲いてゆく。さらには、馬場さんが気になっていた「お菓子のパッケージに書かれている誘惑するような甘い文言」についても言及。まだ気になっている多くの店にも行っていないようだが、最終成果報告会の場で取り上げるテーマとしては、このテーマも捨て難い。2人の興味が溢れ出し、最終成果報告会に向けて一体何に絞るべきなのか……と思索していたようだが、チームMODのメンバーからの意見はズバリ「全部やってみよう！」だった。気になるのなら衝動でしょ！自分の中にある正直なことを整理してしまう必要なんて無い！そんなこんなで、テスト期間が明けたらバンバン動いていこうということでミーティングは終了。ミーティング中はもちろん色々な方向に話が脱線したが、終始3人でグラグラ笑って

いたことが印象的だった。そして最終成果報告会の日。これまでの半年間の観察の経緯から、2人で集めたお菓子のパッケージを分析したもので、これまた茶目^{ちめ}つ気^けたっぷり、遊び心に溢れたスライドで表現してくれた2人は、突然「私たちがこれまで観察投稿していたSNS上で、密かに『なぜなぞ』を仕掛けていたんですが、気付いた方はいましたか？」というサプライズ。見事に参加者はじめ、チームMOD&CODも気がつかず……、一本やられた！そんな小さな日常を楽しむチカラを遺憾無く発揮する『C』らしい演出が、最後の最後まで光った、会の締め括りとなった。最初は村木さんたった一人だったことが嘘のように、多くの仲間や地域の人々とつながっていったチーム『C』。観察し、自分の衝動に素直に動くことで大きなムーブメントを起こす。それこそが『C』「チューバット」というデザインのだと実感し、地域と若者がつながるためのプロジェクトが目指すところの本質なのだ、改めて確信した時間だった。



お菓子のパッケージに書かれている、消費者を誘惑するような甘い文言への「疑問」や「ツッコミ」のオンパレード！
全約20種にもおよぶパッケージに対する「疑問」や「ツッコミ」は、いかに私たちが何気ない言葉のデザイン・操作に踊らされているのかを容赦なく炙り出してくれていた！



昨年に続いての
リベンジ!

感謝する姿勢を 観察したい

チョコ依存症

「今までワークショップに一度も参加できず、最終成果報告会を終えて悔いが残っています……。今日の最終成果報告会を通して『国語・算数・理科・デザイン』にさらに興味を持ちました。今後このプロジェクトに関わり、日常の中で見つけた気付きや感想をどんどん伝えていきたいです! そのようなことは可能でしょうか……? (全文は2022年度のアーカイブ本に掲載)」

これは、ちょうど1年前、2022年度の最終成果報告会終了後、その日の夜

に『27』というチームの加藤友奈さんという一人の生徒から届いたメッセージ。一度はプロジェクトに参加する意思表示をしたにも関わらず、結果的に自分が納得のいく結果を出せなかったことを悔しく思った彼女は、なんと昨年に続き今年度のプロジェクトにも、果敢に一人再びチャレンジすることを決意。再チャレンジに際して考えた自身のチーム名は、『チョコ依存症』。ストレスを溜めやすい自分、そして、そのストレスを解消するためにお菓子(チョコ)を食べてしまう自分を『チョコ依存症』とネーミン

グできるところが、なんとも彼女らしい。ちなみに昨年度の彼女のチーム『27』が観察したテーマは、「お菓子とストレス」の関係についてだった。

そんな彼女の2年目の観察は、家の玄関先のコンクリートの隙間から、突如として咲き出た花が抜き捨てられない状況や、家族の心理を観察したり。人はよく「間もなく行きます」「間もなくできます」という言葉を使うけれど、「具体的に、間もなく」とはいったい何分なの?」というような、曖昧な認識の中で日々使われてしまっている言葉の観察など、他チームとはどこか一味違った視点が感じられるものだった。

2023年度に入り、新屋高校の生徒会長に立候補したという加藤さん。10月に開催された2回目の集中ワークショップの場で「ストレスを感じやすい私は、生徒会長になり、今にも胃に穴が空きそうです!」と、昨年に続いて「ストレス」というキーワードを軸に発表。正直なところ、生徒会長のストレスがあまりに大きすぎて、昨年度に続いて今年度もこのプ



昨年 2022 年度のプロジェクトにも、新屋高校の友人と2人で組んだチーム「27」として参加していた加藤さん。最終成果報告会の当日は急遽友人が欠席という一人心細い状況のなかで、堂々と発表のステージに上がった姿が印象的だった。

プロジェクトを諦めそうになった自分
が……と、後から本音を話してくれた加
藤さんの気持ちも正直であり、そのこと
を隠さずにMODのメンバーに話してく
れた、彼女の姿勢も印象的だった。

そうして「ストレス」という日常の負
荷に日々鍛えられたからだろうか（笑）、
彼女の根っここの気持ちは、以前にも増し
て強くやさしく育まれていた。家族で東
京ディズニーランドに行った際、10月の
集中ワークショップの会場で、他の参加
チームの生徒たちに配るためのお土産
（お菓子）を用意してきていた彼女。ま
だまだ若い高校生にとって、このような
気遣い・気配りができるのは、そうそう
簡単なことではないだろう。

そんな強くやさしく成長した加藤さん
は、日々の暮らしや人の営みを観察する
なかで、人が人に「感謝する」というこ
とは、生きる上でとても大事なことの
では……という深い考えに至っていた。
そして、自身の日常生活における「感謝
する姿勢」について観察し、最終成果報
告会で語り尽くしてみようと思いついた

おもいやりのデザイン 感謝 人とつながり

人間は「感謝」を簡易化して
しまっているのではないかと？



昨年の最終成果報告会の後、学校の授業「総合的な探究授業」の一貫で、
既に「感謝」に対する問題視を、「おもいやりのデザイン」と題し、言及・発表していた加藤さん [資料提供：加藤友奈さん]

のだ。「感謝こそが、人や地域とのつな
がり」なのだということを、2年目のス
テージで思い切り言葉にしてやろうと意
気込んでいた。

……が、しかし、最終成果報告会当日
に体調を崩してしまった彼女は、最後の
発表ができず、昨年に続き心残りのプロ
ジェクトの最後を迎えてしまう……。こ
のまま彼女の2年越しの気持ち・チャレ
ンジを放っておくことなどできなかった
MODのメンバーは、最終成果報告会の
数日後、彼女に実際に会いに行き、「感
謝する姿勢」の観察について話を聞いて
みた。

その時、加藤さんが話してくれた観察
の中で興味深かったのが、加藤さん自身
は普段、コンビニエンスストアやスー
パーのレジで買い物をする際、必ずその
レジの店員さんに無意識に「ありがとう
ございました」と感謝の気持ちを伝える
習慣があるのだというのだ。普通は、レ
ジの店員がお客様に発する言葉を、お客さ
んである加藤さんが店員に対して言葉に
するという何気ない姿勢。そんな彼女の

『感謝』こそが、人や地域とのつながり

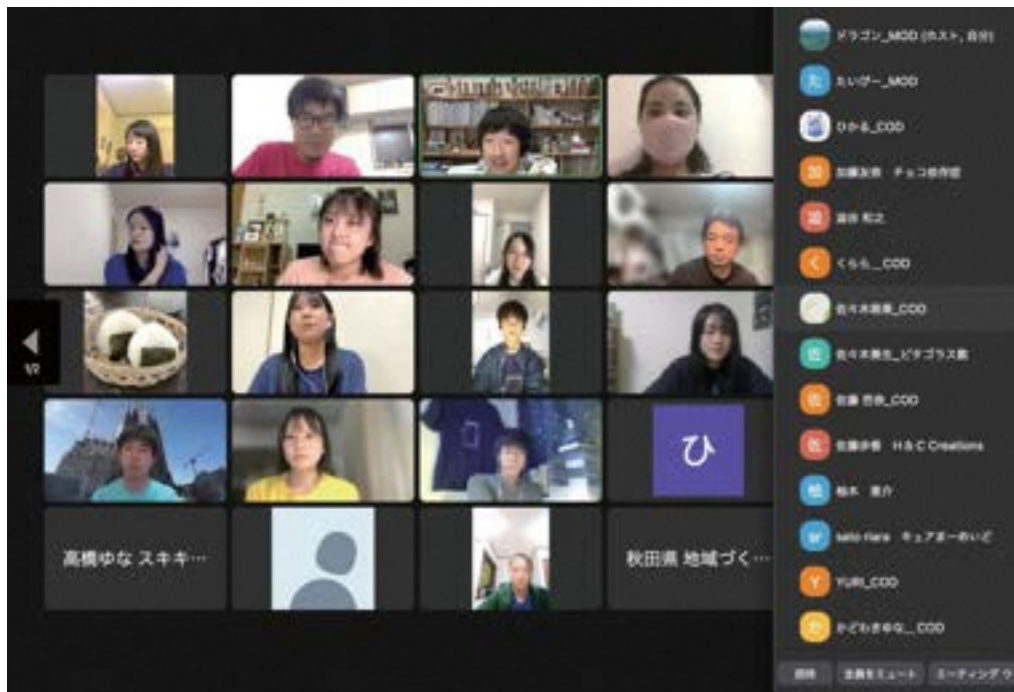


日常が気になってしまったMODのメン
バーは、今年のCODのメンバーでもあ
り、現在、新屋高校の副生徒会長として、
生徒会長の加藤さんを支えている大倉未
有さんにも声を掛け、近くのコンビニエ
ンスストアへ向かった。そして、大好き
な納豆巻きを胸に抱きしめ、お会計の後、
コンビニの店員さんに「ありがとうござ
いました」と感謝を伝える、彼女自身の
普段のありのままの姿を見ることができ
た。

2年間、苦しみながらも精一杯このプ
ロジェクトに向き合ってくれた加藤さん
が、心から言葉にした「ありがとうござ
いました」という何気ない感謝の一言。
決して派手な最後のアクションではな
かったが、その感謝の言葉やそれを声に
する姿勢は、2年間このプロジェクトに
挑戦した彼女だからこそ意味深さが
あった。2年間このプロジェクトに粘り
強くつながり続けたことこそが、彼女に
とっての「地域につながる」大きな一歩

であり、成果であった気がする。
彼女が最後に言葉にしてくれた「あり
がとうございました」は、この2年間で
自分自身を成長させるきっかけになった
かもしれない「国語・算数・理科・デザ
イン」というプロジェクトへの、「あり
がとうございました」でもあるようで、
感慨深いものだった。





オンライン (zoom) 集中WS | 2023.9.21



「若者と地域をつなぐプロジェクト事業」事前説明会 | 2023年6月18日 | 秋田市文化創造館



第2回集中WS | 2023年10月15日 | 旧松倉家住宅 松倉



第1回集中WS | 2023年8月11日 | 秋田公立美術大学



本事業に取り組みはじめて5年目。今年は大きなチャレンジがあった。それは、プログラムの運営を過去のプロジェクトの参加者であった卒業生に協力してもらうこと。卒業生といっても、現役の女子高校生。事前説明会から、集中ワークショップ、最終成果報告会のプログラムデザイン、司会進行、発表資料作成、受付など、ほぼすべての運営を担当した。きっかけは、彼女たち自身からの参加希望の申し出。「また来年もこのプログラムに関わりたい!」との嬉しい声だった。この事業が5年目に入るにあたり、運営チームが議論するなかで、この事業で大切にすべき価値は、これまで参加してくれた方々ともつながり、コミュニティが育まれていくことに気づく。地域とつながる力を育んだ人材を毎年輩出するだけではなく、彼ら同士がつながりコミュニティとなり、新たに彼らが周りと共につながる力を育み、広がっていくようなこと。もしそれが可能になるのなら、この事業の取り組みの価値を倍増させることができるはず。

また、地域とつながる力を育むのに、卒業生がプログラムを実施するほうが、参加者の学びが深まる可能性もあると感じていた。主体性を育む探究学習の場では、年齢の離れた大人と取り組むより、年齢が近い者同士で学ぶ方が、自然体の中で活動に取り組むことができる。「同世代ができたんだから自分だってできる!」と、学びを加速させていく。

結果は、本当に素晴らしいものだった。企画作りでは、プログラムの魅力が学生に届く伝え方を考え設計し、進行から参加者との関わり方まで、すべての段取りに気を配って運営し、参加者は緊張することなく楽しく前のめりに取り組めた。これは、大人が前で司会進行を務めていたらできない場の空気作りだった。

最終成果報告会で印象的だったのは、資料・スライドをただ棒読みで読み上げるチームがいなかったこと。チームで劇をしたり、会場に向けてクイズをしたり、ステージ上に座って発表したり、全員が自身の言葉で語り伝えようとしているのが印象的だった。それは、これまでの



伊藤愛優菜 | Ayuna Ito



いわもと | Iwamoto



大倉未有 | Ookura Miu



門脇結那 | Yuna Kadowaki



鎌田ひかる | Hikaru Kamata



小林花補 | Kaho Kobayashi



佐々木萌果 | Honoka Sasaki



佐藤芭奈 | Hana Sato



内藤 蓮 | Ren Naito



ゆったん | Yuttan

4年間では見られなかった光景だった。それが可能になったのは、間違いなく運営する卒業生チーム『チームCOD』が、楽しく取り組んでいたからだ。大人たちが見えないところで、卒業生チームはグループを作り、プログラムの制作、役割分担、資料作りなど、学園祭を楽しむかのように協力し合い、責任をもって濃厚な議論を進めてくれた。大人の心配は全くもって的外れであり、余計な心配をしたこと、高校生だからと見くびっていたことを、心から後悔・反省している。『チームCOD』の多くが高校3年生で、この春に県内外の大学に進学が決まった中で、「また来年も運営に関わりたい!」との声が聞けたのが嬉しい。毎年学びが多いプログラムではあるが、今年ほど学びが深まった1年はないかと自負している。『チームCOD』のみんなに心から感謝をしつつ、5年間事業を続けてきた中で育まれてきた関係性の上に、このような成果が生まれたことを、事業に関わった学生、地域の方々など、多くの皆さまと喜びたいと思う。





akitade.jp

令和5年度
若者と地域をつなぐプロジェクト事業

国語・算数・理科・デザイン！ 最終成果BOOK

《編集》
一般社団法人ドチャベンジャーズ

《編集・アートディレクション・デザイン》
澁谷 和之（澁谷デザイン事務所）

《写真》
鄭 伽倻（小宇宙感光）

《参加チーム（全8チーム | 発表順）》

- ・キュアまーめいど
- ・DEAR
- ・ピタゴラス数
- ・sugar
- ・スキキライ
- ・H&C Creations
- ・I3Lチューバット
- ・チョコ依存症

《運営・編集協力》

チームMOD（もっとお尻を出す）

黒崎 平（安養寺：好間風のある地域）
松嶋 駿（スタジオSSB）
柚木 恵介（秋田公立美術大学 准教授）
澁谷 和之（澁谷デザイン事務所）
柳澤 龍（一般社団法人ドチャベンジャーズ）
鄭 伽倻（小宇宙感光）

チームCOD（ちょっとお尻を出す）

伊藤愛優果／岩本莉々／大倉未有
門脇結那／鎌田ひかる／小林花補
佐々木萌果／佐藤芭奈
田畠優里／内藤 蓮（五十音順）

主催：秋田県あきた未来創造部地域づくり推進課
運営：一般社団法人ドチャベンジャーズ
企画・トータルディレクション：澁谷デザイン事務所

2024 年 3 月発行

全8チームの
最終成果報告会の
様子はコチラから



これまで10年以上、「地域とつながる」と呼ばれる仕事を色々な土地で行ってきた。
デザインやアートの力で……、という言葉われ方もするが、実は無力なことが多く、ほとんどの場合が、逆に地域の方々にお世話になりっぱなしである。できることと言えば、そこに何通も通い一緒にご飯を食べること。逆に力仕事をしようものなら、自らは全然役にも立てず、約束の時間に行ったら予定していた作業はもうほとんど終わっていることも少なくもかわらず、お世話になったと言っていたいだいたり、今も季節の野菜が届いたりするのだ。これまでの自分の経験からすると、「ただそこに通うこと」、**土地や人に興味を持ち、話すこと**が、「地域につながる」ことに他ならないのである。
今回、こうして観察をし続け、お互いの地域へ通い合った高校生たちにも同じ現象が起こっていたのかもしれない。観察をきっかけに違和感に気が付き、また現場へ行く。勇気を出して人に聞き、深く調べようとするうちに、未知の誰かとまた自然につながっていく。そこに居ることと物語が生まれた。そんな気がするのだ。
一方、世の中の流儀の方は、特定の土地を持たずでただ物事をシェアし、擬似的空間で事が処理されるよう加速していくようだ。そうすると、**高校生たちが居たい地域自体が見えなくなっていく……**のかもしれない。果たして皆が言う「地域とつながる」ことは、今後どう必要とされ、どのように変容していくのか。これもまた深く観察していく必要がある。

秋田公立美術大学 准教授
柚木 恵介

つい先日、「東北デ、東北で、デザインするということ」と題して、東北6県のデザイナーが一堂に会するトークショーを企画し開催した。その場で挙がった話のなかで、「最近の地方のデザイナーは『**地域のデザイナー**』と呼ばれるから活動し、メディアにも注目されているけれど、自分たちから『地域』という言葉を取り除いたら何が残るのだろうか？ これから社会で求められるデザイン・デザイナーとは、どのような在り方なのだろうか？」という議論があった。地方創生が叫ばれ、だいぶ時が経つなかで、ここ数年「ローカルデザイン」「地域デザイン」という言葉が使われはじめ、今では、それがどこか「流行りの肩書き・言葉」のように捉えられ始めようとしていることに違和感を感じ、心のどこかで危惧をした。
「地域」とはなんだろう？ 以前、このプロジェクトへの参加者の中に、「地域とは、道端ですれ違ったら、自然に挨拶できる人が暮らす**範囲のこと**」と言葉にしてくれた生徒がいた。そのくらい「地域」とは、狭い日常に存在する当然の領域のことでありながら、言葉にし定義しようとする、簡単なようで難しいもの。
そんな、双方いよいよ得体が分からなくなってきた「**デザイン**」と「**地域**」という2つのキーワードを掛け合わせた**取り組みこそが**本事業であり、本年度は今一度、この2つを掛け合わせることが、「地域」と「若者」をつなげていくことにつながる意味を感じ直した半年間だった。いやしかし、ホント、僕は、つまり、まだまだ無力なんだと……も確信した。

（以下、柳澤くんに続く）
澁谷デザイン事務所
澁谷 和之

本事業を通して5年間積み上げてきたものが花開いた1年だった。学内行事で全校生徒の前で、卒業生が本事業を紹介し、それを見た学生が応募したり。アーカイブ冊子を見た教職員やデザイナーが、オプザーバーとして通年参加したり。『国語・算数・理科・デザイン』をテーマに、毎年プログラムを磨き続け、1つの型に辿りついた印象がある。
地域コミュニティの維持・活性化にむけ、若者への社会参加を促す事業に取り組む前に、立ち止まってみた。時代の変化と共に、これからの社会を担う県民のあり方も20世紀と21世紀では様変わりする。平成生まれの若者たちが作る社会は、私たちが思い描いたものとは異なる。次世代が作る社会に向けた変化を促すのに必要なことは何か。スタンフォード大学での20年以上にわたる研究結果は、「**権限の移譲**」。簡単に言えば、**既得権益を手放すこと。権力や地位のある人が、その権利を手放すとき、社会はより良い未来へ向かいはじめる**。
そこで、今年は企画運営をCOD（過去にこのプロジェクトに参加していた卒業生）と共に取り組んだ。事前説明会、集中ワークショップ、オンラインワークショップ、最終成果報告会、どのプログラムも、これまでとは全く違う形になり、参加者は過去最高に前のめりに取り組み素晴らしい結果になった。
今年1年のプログラムを通しての学びは、若者と地域がつながるのに、**変わるべきは、私たちだったということ**。私たちがもつ権限を手放し、次世代と共に未来を作りたいと思う。

一般社団法人ドチャベンジャーズ
柳澤 龍